

坂本 勉著

『イスタンブル交易圏とイラン』

——世界経済における近代中東の交易ネットワーク——

慶應義塾大学出版会 二〇一五・四刊

A5 四〇〇頁 六三〇〇円

本書は、近代以降のイランからイスタンブルに延びる広域的交易ネットワーク（著者は「イスタンブル交易圏」と命名した）に関する研究書である。本書において著者は、オスマン帝国の非ムスリム商人やイラン商人、ヨーロッパ商人によって展開された、綿製品・絹・絨毯・タバコといった商品の交易活動から、一九世紀以降のイスタンブル交易圏の在り方を、多彩な史料を駆使して明らかにしている。本書の特徴として、ウオーラーステインが唱えた近代世界システム論への批判的観点が挙げられる。一九世紀半ばまでに、ヨーロッパ資本主義経済の浸透によって、オスマン帝国の経済的従属が進んだとする彼の議論を、著者は生産過程と対ヨーロッパ貿易構造の変化に集中し、非ムスリム商人の役割と流通過程への考察が欠如していると批判する。むしろ、現地市場の事情に精通しないヨーロッパ商人が商取引をする際は、現地の非ムスリム商人やイラン商人が保持した、強固で自律的な交易ネットワークに依存していた点を著者は強調する。

まず第一章「イスタンブルの中継貿易とイラン」において、イ

ランの対ヨーロッパ貿易を、ヨーロッパ経済への従属化ではなく、流通を実際に担った現地商人がヨーロッパ商人に対抗して形成した、広域的・重層的な交易ネットワークが中心的に論じられる。具体的には綿製品貿易における、イラン商人アミーノッザルブと非ムスリム商人の「共存と競合」の関係に焦点が当てられる。続く第二章「イランのアルメニア系商人の交易ネットワークとイスタンブル」は、アルセニア家の相続争いに注目しつつ、アルメニア系イラン商人の国際的な商業活動の実態を探る。

第三章から五章では、絹・絨毯・タバコという、イスタンブル交易圏の主要な商品をめぐる問題が扱われる。第三章「イランの絹貿易とオスマン帝国のギリシア系非ムスリム商人」は、伝染病による絹生産への打撃を経て、ギリシア系商人が絹貿易の中心を生糸から繭に転換し、生産・流通過程を掌握する中で、イラン経済がイスタンブル交易圏に組み込まれる様を描く。

絨毯を対象とする第四章「イランにおけるカーペット・ブームとイスタンブルの中継貿易」では、イラン商人が絨毯の生産と流通をめぐってヨーロッパ商人と競合して、自ら絨毯生産に関与し、イスタンブルの中継貿易市場において独自の交易ネットワークを構築したことが論じられる。

そして第五章「イランのタバコ・ボイコット運動とイスタンブル」では、タバコ・ボイコット運動を政治的民族運動ではなく、経済的観点から見直し、イラン商人がオスマン帝国のタバコ市場から締め出され、タバコ流通を取り戻せなかった実態が明らかにされる。

終章「変容するイスタンブル交易圏」において筆者は、今日のイスタンブル交易圏について、トルコ系の商人や企業家が、非ムスリム商人の培った流通の強みを継承しつつ、輸入代替工業化を進めて交易圏を拡大したと述べて、本書で扱われた近代における変容が、現代にも連続していることを示し、結びとしている。

本書は、著者の長年の研究成果をまとめたものであり、いわば彼の生涯にわたる研究の集大成として位置づけられるであろう。

(岡部大悟)